

コラム 映画紹介

「誰も知らない基地のこと」

脇田 勇

我が孫娘とそっくりな女の子が頭の上を飛び去って行く戦闘機の爆音に、耳を押さえながらその行方を目で追っている。そのなんともいえない表情の映画館のポスターに魅かれた。

沖縄返還40年を迎える今年、オスプレイの沖縄への配備をめくり沖縄のみならず日本中を騒がせている。

みなさんをご存知でしょうか？冷戦終結後も世界38カ国に716カ所の米軍基地があり、25万人の米軍兵力を張付かせ、米軍予算を膨張させ続けていることを。

そして、米軍が一日に消費する原油量はスウェーデン一国の一日の消費量に等しいことを。

このドキュメンタリー映画は、2007年にイタリアで起こった基地拡大への反対運動の中で、イタリアの若手監督2人が、その謎を探る旅に出て、製作されたものです。

基地の騒音や兵士が起こす事故や犯罪に苦しむ住民と専門家への取材を通じて、余りにも横暴な米軍と、膨らみ続ける軍産複合体（米国の軍事産業・武器関連輸出企業などの武器商人としての巨大企業）の真実を暴いていく。

来年は、米国の軍事予算が大幅に減額されるとの事。そのため、それまでにオスプレイを大量生産し、沖縄をはじめ世界の基地に配備しようとする米軍と軍産複合体が動いたと見るべきであろう。

日本政府は「抑止力」という方便で、沖縄の基地・日米安保条約を正当化しようとするが、別名「未亡人製造機」と呼ばれる物騒なオスプレーを、よりによって「世界一危険な基地」普天間に配備を進め、日本各地で低空飛行訓練を行うと言う。アメリカ国内では、環境問題などで訓練中止に追い込まれる所も出ているというのだ。

この映画を見れば、米軍と軍産複合体、基地問題の答えは出てくるのではと思った。

最後に、この映画を製作した2人の監督が、日本に対してメッセージを次のように寄せているのを紹介します。

（金融ユニオン・愛知）

.....

「親愛なる日本の皆さんへ」

この作品の企画を立てた当初、日本で取材することは考えてもいませんでした。それが出来上がった作品では、沖縄の撮影部分こそが最も重要なパートとなっていました。私たちが沖縄で目にしたことが、政治的、社会的、そして精神的に何よりも衝撃的だったからです。しかし、それ以上に、沖縄で出会った方々に強く刺激を受けたからでもありました。

彼らの中には、不平等な力関係に直面しながらも、決して希望を捨てない人々がいます。その姿は日本人の精神性の高さや心の強さを見せてくれました。彼らの姿に続こうと、日本の、そして世界の人々がこの映画によって勇気づけられることを願っています。

希望と敬意を込めて

[問合せ先]

配給・宣伝・アンプラグド

TEL 03 6408 0625